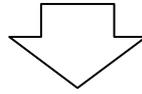


## 孤立者としての安部公房

・『終わりし道の標べに』より

徴兵と言う国家の強制を拒否し、故郷日本を捨てて遠く満州の地を一人歩き続ける「私」。その、何故に人間はかく在らねばならぬのか？と言う問いを發し、「自己の占有」を求め続ける姿を、「高」、「陳」という人物を通して描いた筆者の処女作。

この作中の「彼」の姿には筆者の、自分を取り囲んでいる場であり、自分を形作る存在でもある「故郷」を拒み、自分の存在を「故郷」から独立させて自由にする事で、あらゆる事物を相対化、客体化してとらえようとする姿が重なる。



### 「故郷」からの「逃亡」、「脱出」

⇒その後の作品で、外部に立った「孤立者」の立場から、現代の人間・社会を描く。

埋没する人々（『棒』）⇒アイデンティティを持たず奴隷の生を与えられる  
自己閉鎖する人々（『赤い繭』『デンドロカカリヤ』）⇒抵抗していた対象に捕えられる  
闘争・超克する人々（『詩人の生涯』『洪水』）⇒主体的な行動による革命、変革へ

### 『砂の女』

「彼」：日常からの逃避と、自分の名前を残すことを目的に虫捕りに出かけた教師。同僚にも軽蔑を抱いており、打ち解けてはおらず、妻である「おまえ」とも余所余所しい関係。  
⇒社会の中に所属しているが、そこでは「名も無き一人」と言った存在。「彼」

### 第一章

「彼」が、虫捕りに行って「村」へ迷い込み、捕えられる。「村」の中で生活はするが、飽くまでも村の外の間人として、異常で理不尽な社会としての「村」を拒絶、弾劾し、代弁者としての「女」を加害者、共犯者としてなじる。

⇒配給で生かされているが、労働を拒絶する部外者。「お客さん」

・社会の一員として、外の社会の価値観から穴の中の村を見てその生活を一方的に否定し、脱出して外の世界に帰ろうとしている。

## 第二章

### 1. 計画

脱出の計画の一部として女の家で暮らしながら、それまでの生活を振り返る。

- ・同僚との関係、教師と言う仕事について
- ・自身の社会的な「身分証明」について
- ・新聞を通して見る外の社会（=幻の塔）
- ・女との関係から「おまえ」を比較して思い出す

⇒義務を拒むも、「村」に敗れ、従いながら、脱出の機会をうかがう

- ・穴の中から、外の社会での生活を客観的に見直す。
- ・自己の「身分証明書」を与え、存在を保証してくれる社会にしがみつこうとする。

### 2. 決行

穴から出て「村」の外を目指すのが、思い出すのは「女」の姿と二人での生活。

「女」への負い目、罪悪感を抱く。

- ・一度穴の外へ脱出し、穴の中での生活を改めて見直す。
- ・女の言葉を思い出しながら、穴の中と外の社会の生活を見比べる。

### 3. 失敗

女への同情、村の中と外での生活と日常への思い。

（「納得がいかなかったんだ……//良いような気がしてしまうんだ……」）

- ・穴の中と外の社会の生活を見比べた上で、「生活観」を抱き、それらの生活の優劣に関わらない日常からの脱出を望む思いを女に吐露する

### 第三章

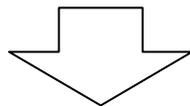
1. 脱出の意思を持ちながらも「村」に順応し、《希望》と日々の労働などに従事して生活。その生活に馴染みつつある自分に気づき、苛立つ→空想の裁判と弾劾を受ける。
2. 「女」の「村」と「外の社会」の関係の話を聞き、加害者と被害者の関係が転倒する。  
→社会の側を「他人の事」と言い、女（＝村）の意見を受け入れ、同意する。
3. 「穴の外」への憧れと嫉妬から、女に一方的に協力を求め、拒まれる。しかしそれでも女  
に見捨てられはせず、河原の小石（＝賽の河原の石）としての自分だけを感じる。  
——女によって価値を与えられている「男」

- ・砂の村の住人の一人として生活し、その生活に馴染んでいる自分に苛立ちつつもそのことも次第に受け入れる。
- ・その生活の中にありながらも、その日常からの脱出の自由を望んでいる（村に来る以前の外の社会で生活していた頃と同じ感情）

4. 《希望》から水を手。その研究に没頭  
——「穴の外」に出る力を得たと感じ、かつての日常も今いる「穴」も塔の上から眺めるような気持ちになる。

- ・「穴の中」の自分も「穴の外」の自分も超えた自分を感じる
- ・砂の村の中でのアイデンティティを確立し、「誰かに話したい」という、周囲にも自分を認めさせたいと言う思いを抱く。

⇒逃げられる状況になり、穴の外へと出るが、《希望》のある穴の中へと戻っていく。



当然のように従っている現代社会の正当性の否定  
そこでの奴隷的な生の暴露とそれを超えた自己の生の確立